

水墨画を始めた動機

第1のスタート。…小筆一本で始めた水墨画

水墨画もどきの絵を最初に描いたのは、約35年前になります。研究のためにアメリカに駐在して1年ほど経ったとき、休日にサンフランシスコの日本人街の本屋さんに立ち寄り、書をやったことがある私は、水墨画の本を見て「あっ、これなら描けそうだ」と思って数冊の本を買いました。帰りに「小筆、墨、硯、色紙」と最低限の道具を求めて、アパートへ帰ってから早速に本を頼りに描き始めました。(アメリカ漬けの毎日で、きっと日本が恋しかったのでしょう)翌日、描いた絵を会社へもって行き、オフィスの壁に飾りました。数日して部屋からなくなっていました。犯人は、社長秘書のTさんでした。Tさんの目に留まり、もらっておいたよといわれました。褒められて気をよくした私は、滞米中ずっと描き続けました。異国の地で日本への郷愁に駆られ、褒め言葉に気をよくして水墨画との付き合いが始まったという訳です。

第2のスタート…褒められて調子に乗り、我流で描き続けた水墨画

日本へ帰ってからはしばらくは忙しくて、あまり絵を描きませんでした。しばらくして、結婚し、子供が生まれ、物心がついた頃が第2のスタートでした。そのころテレビで流行していた「小公女セーラ」を描いてくれと子供にせがまれ、お酒を飲んだ勢いを借りて、書筆と水彩絵の具でさらさらと漫画チックに描いてやりました。すると、子供の小さな目が大きく輝き、お父さんすごいと言わんばかりに喜んだのです。それが嬉しくて、度々絵を描いてあげました。そのうちに、自分の楽しみとなって、色々な絵を我流で描き始めました。あるとき、行きつけのお店にもって行き、壁に飾ってもらいました。絵は「ザリガニ」の絵でした。次に持っていった絵は「鯉の滝登り」の絵でした。お店にマイグラスならぬマイアートを飾って飲んでいました。しばらくするとその絵がなくなりました。お客さんが気に入って持っていったというのです。そのとき、「なぜかとても嬉しかった」ことを今でも覚えています。

第3のスタート…師との出会いと教え

本格的に水墨画を習いだしたのは、我流で書き始めた数年後です。地域の水墨画教室に参加しました。先生は、友禅の絵付師として著名な方でした。最初は、お手本をいただいてそれを習っていました。あるとき、先生と一緒にタバコを吸っていましたが、先生が「順大さん、私は職人だからそのまま習わんように。大家の絵を模写したらええ。描いて持ってきたら見てあげます。」と言われました。合同練習中は手本を真似し、家では絵のジャンルを問わず諸家の絵を模写しました。

もう一人の先生…それは母「垂風」です。高原のスケッチから戻ってきて、作品にしていたら、台所仕事をしていた母から「ダメ！ダメ！」という声がかかりました。調墨皿から筆に墨を取ったときに、筆に迷いがあり筆管を回していたのです。筆を回しては、墨遣いができないというのです。…ここで始めて、中墨・淡墨の調墨と色見皿と筆の操り方が重要であることを教えられたのです。間違っただけの癖はなかなか直りませんでした。3 - 4ヶ月位かけてようやく矯正できました。水墨画の参考書を見ますと、どの先生も同じように道具を置っていますが、どうやら墨遣いは各自各

流のようです。

絵心を師から、墨遣いを母から習う…これが順大流の墨遣いの原点(詳細略)となりました。

第4のスタート…特訓と生徒さんから学ぶ

会社を辞め水墨教室を始めるに当たって、最初は1日7 - 8時間の特訓をしました。人の前で必ず書けるための「書」による筆使いの特訓です。学生時代に師からいただいた書法の虎の巻が役立ちました。…丸一年間この練習を続けた後、先生の教えには女意味があったのだと、30数年後に真意を理解できた気がしました。

ついで、半年かかりで水墨画の教材を作り、いよいよ教室を開始しました。教えていますと、生徒さんにとって、どこが描けないかがよく見えてきます。墨の取り方はもちろんですが、手本の特徴ばかりに目が行くのです。「そのままにかけない」とか「先生の失敗部分」に目が行くのです。…そこで、「墨遣いの大切さ」と「スケッチをしてから絵を描く」など、教え方を変えました。手本という目的ではなく「描いて見せた結果」を渡すことにしました。生徒さんも様々ですから、マン・ツーマンの指導になります。

そんな苦闘の中で、順大流水墨の特徴は何か棚卸をしてみました。得意の実験によってです。…その結果、墨遣いによって、「墨を滲ませずに、濃淡の変化(グラデーションの立体感が出る)「湿気に強い描き方」であることが判明しました。順大流は墨遣いが極意であると自己発見したわけです。

教室を始めて解ったことは、「教えるというよりは一緒に学ぶことが大切である」ということ、「一人ひとりに合う教え方がある」ということなどです。…会社時代のマネジメントと似ていると思います。それなら、会社時代のようにワイワイガヤガヤと練習すればきっと楽しいし、練習の実が拳がると思えてなりません。